



HAL
open science

アントニン・レーモンドの住宅建築における自然との関係の表現について：軽井沢の夏の家（1993）

Yola Gloaguen

► To cite this version:

Yola Gloaguen. アントニン・レーモンドの住宅建築における自然との関係の表現について：軽井沢の夏の家（1993）. お茶の水大学 比較日本研究センター研究年報 / Center for Comparative Japanese Studies. Annual Bulletin, 2011. <hal-02905966>

HAL Id: hal-02905966

<https://hal.science/hal-02905966>

Submitted on 27 Jul 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

アントニン・レーモンドの住宅建築における 自然との関係の表現について

—軽井沢の夏の家（1933）—

ヨラ・グロアゲン*

1. はじめに

本論文は西洋の建築家、アントニン・レーモンドが1920年から40年間にわたって日本に生活し、おこなった仕事を対象とする。アントニン・レーモンドの場合、日本の空間と自然の《受容》というよりも、空間と自然に対して日本が持っている文化との《出会い》といった方がより適当かもしれない。というのは彼の師匠であるフランク・ロイド・ライトとは反対に、彼がはじめて日本の文化概念に直面することになったのは、日本においてであったからである。

とはいえ、レーモンドが、日本到着前から日本の建築に対して、部分的ではあるにせよ、精通していたということも忘れてはならない。なぜなら、1916年には彼と妻のノエミはライトの指導のもとに、ライトの設計工房タリアセンで生活し、仕事をしてきたからである。しかしながら、この日本文化への接触は、あくまでもライトの視線を通してなされたものであった。ライトの興味は、何よりも、彼が、その美と形に虜になっていた日本のグラフィック・アートと歴史的建築にあった。レーモンドは自伝の中で、日本に対するライトのこの姿勢を、日本到着後の1920年に二人の間に起きた不和の主な理由の一つとしてあげている。

さて、本論文では、アントニン・レーモンドの住宅建築における建築と自然の関係についてで、より正確に言えば、この関係の《表現》に関して

扱う。さらに言えば、レーモンドが、建築を通して人間と自然の関係のタイプのひとつをどのように翻訳して表現したか、その方法について述べる。なお、このテーマは、1920年と1938年の間にレーモンドが日本で建築した邸宅に関して、筆者が京都大学で行った研究の延長上にあるものである。

2. 本稿のテーマ

レーモンドの一つの住居の考察から出発して、様式と象徴の両面から、自然との関係に関して、どのようなタイプが見られるかを見ていこう。こ



図1 夏の家，軽井沢（1933）

の目的のために、レーモンドが1933年、軽井沢に建築した夏の家を例にする（図1）。

軽井沢の家はいくつかの点で重要なものである。まず、これはレーモンドの創作活動の過程で重要な一時期を画定している。この家を建築した時は彼の最盛期にあたる。この時、彼は日本で建築家の職を行使して既に15年経っていた。また、この

*フランス国立高等研究実習院院生

時期、彼は難しいなりに徐々に、彼の師であるフランク・ロイド・ライトの、形態上での影響から距離を置く事に成功している。例えば、多数の邸宅建築において、コンクリートを材料に使った建築を行っている。なお、この中には1924年から27年にかけて建築した彼の東京の自邸がある。

これに並行して、レーモンドは、特に農村の民衆住居への興味を示しながら、日本文化の見方と精神を養っている。また、自然の中での散歩や遠出を愛好したレーモンドは、特に岐阜県の民家の立ち並ぶ村々を訪れては、深い影響を受けていた。そして、この時期の経験が、これは重要なことであるが、前川国男や杉山雅則などといった若い才能豊かな建築家、そして有能な大工師たちとの貴重なグループの形成に発展することになった。さらに大事なことは、この軽井沢の家は、彼の家族と彼の親しい協力者たちのために建築したということで、制作の際に、注文建築の制約を受けずに済んでいたということである。そのため、レーモンドは、日本において重要な作品を実現した最初の15年、つまり、日本における彼の最初の15年の活動の総決算をするのに必要な要素を、この時期に、全て手中に収めることになったのである。

現在入手可能な資料の中に、軽井沢の家の建築に関する情報は少ししかない。しかし、彼が生涯の間に書き残した幾つかの文章の中に、この建築に関する彼の意図や、完成した建物を前にした時の印象などを読み取ることができる。レーモンドが書いたテキストや自伝によれば、この家は短期に建造され、建築にあたっての精緻な設計図はなかったことが分かる。設計を担当した杉山雅則と、大工である高木建次がこの家の施工を任されている。大工の高木はイタリア大使館日光別荘で既にレーモンドと協力している人であった。

3. 分析

3.1. 家の敷地



図2 家の敷地

まず、この家の敷地をとり囲む地形を見てみましょう。完成時を考えると、この家は、非常に開けた地形の真ん中に孤立して、広大な立地に建つことになる。この位置からは、標高2500メートルの浅間山を背景にして、広大な眺望が開けて見える(図2)。このような地勢に家を建てるとなると、建築家は、力強い自然を相手に真っ正面から取り込むことになる。それゆえ、建築家は、このコンテクストを考慮に入れながら、しかも建物と風景の関係という問題を引き受けざるを得なくなる。しかし、この制約こそが、後にレーモンドが《設計の裏にある思考》と呼んだものを表明する可能性を彼に与えたのだった。この《施行》とは、これがなければ建物は単なる意味のない空っぽの殻でしかない、というような建築家の深い意図のことを指す。レーモンドは日本の家屋の建築の中に、この関連性を感じ取っていたのである。彼は1935年に次のように書いている。「日本の家は自然の形態が発展したものに似ている」「どんな点においても、日本の家は、ある意図、目的と結びついている。そのために、家は、単に機能的であるばかりでなく、生活の真の価値への深い理解をも示した、正確で適切な解答を見いだしているのだ……」

レーモンドの言う《生活の真の価値》には、自

然との関係に対して、欧米世界と日本の対立を見いだすことができる。彼は、西欧人については《深く根を張った物質主義者》と評し、一方、日本の文化と建築は《万物の本源》として自然の尊重に基づいていると評した。こうした日本の文化に対する見方は、当時、西欧人の間に広く知れ渡っていたものだった。日本とは、かつてヨーロッパもそうであったわけだが、《進歩》という名において失ったいくつかの価値を保有している国だと考える見方である。19世紀末、20世紀初頭の多くの日本について書いた者にとって、日本は過去に対する懐古的感情の媒体の役目をしばしば演じていたわけである。¹

さて、レーモンドは、モダニズムの巨匠、ル・コルビュジエ、オーギュスト・ペレ、フランク・ロイド・ライトなどに影響されて、現代建築が《再発見》すべき、いくつかの《原則》を立てる。彼はそれを「簡潔性、誠実性、儉約性、率直性」と呼んでいる。これに付け加えて、自然との関係も、建築でもっとも重要な原則の一つであると述べている。彼によれば、これらの原則は、真の現代建築家が、形態と機能の関係、構造そして装飾という基本的な問題と取り組むための指針となるはずのものである。

レーモンドのテキストを読むと、この原則を立てた動機として、一部、彼の設計方法に根拠と理論の有効性を保証するといったねらいがあったことが分かる。事実、彼は、モダニズム運動の高名なる巨匠の列に加わり、彼らと対等の一つの推進者として認められることに腐心していた。そういえば、彼のこの思考形態は、1927年に『近代建築の5原則』²と題された著作を発表したル・コルビュジエの方法を思わせないでもない。このル・コルビュジエの5原則は建築要素の準拠となり、後には国際様式の象徴的要素となるものだった。ピロティ、屋上庭園、自由な平面、水平連続窓、自由な立面、がこれである。

しかし、ル・コルビュジエとレーモンドの思

考形態には一つ基本的な違いがみられる。レーモンドが自分の《理論》を一連の概念、つまり思考方法の上に置いているのに対し、ル・コルビュジエの方は形式に特権を与えている点である。ル・コルビュジエは、古典建築の規範の方法のように、一連の造形形態の基準の上に原則を立てている。

実際、近代建築の主張を擁護したレーモンドは、同時に、この《先進的建築》の名譽ある《犠牲者》でもあった。ある意味で、建築世界の認知を取り付け、日本のモダニズムの奨励者である有力なクライアントの意向に沿うために、彼は国際様式のゲームを演じるしかなかった（図3）。



図3 川崎邸（1933）

自伝の中で、レーモンドは祖父母の農園で過ごしたボヘミアの幼少期のことを懐かしく思い出している。彼は自然を逃避の場だと語っている。そこから、彼は数多くのデッサンや絵画のためのインスピレーションを得た。この期間が、人間と自然の理想的な調和という彼の基本姿勢を形成し、これがフランク・ロイド・ライトの建築と哲学との出会いに、そして日本文化との接近に決定的な役割を演じたわけである。

このように考えてみると、レーモンドが建築5原則をたてたのは、彼の生きた時代の要求と、彼の思考に刻印されている自然に対する深い愛着に一つの合意を見つける方法ではなかったか、と思えてくる。ここで思い出されるのは、レーモンド

と彼の妻ノエミが、彼らの美学と精神の面に、この自然との関係を表現したのは、第一にアートと手工芸を通してであったことである。

彼ら夫婦が東京に到着した時期には、芸術家、工芸家、美術評論家であり、日本と韓国の民衆芸術の擁護者でもある柳宗悦を中心とした一つの運動が形成されつつあった。この運動はイギリスのアート・アンド・クラフト運動から着想を得たもので、同人として、河井寛次郎や濱田庄治などの陶芸家や、アジアで育ち、1910年来、柳と親交のあったイギリスの陶芸家、バナード・リーチなどが集まっていた。なお、このグループは1926年に「民藝」という名称で正式に組織された。

1931年という年は、レーモンドが軽井沢の家を構想し始めた年であり、雑誌「工藝」1号が発行された年である。この機関誌は、それ自体手作りの素材を使って製本されており、このグループが日本や韓国やその他の極東アジアに旅行して少しずつ収集してきたコレクション中から常に精選された名作品を紹介している。図4は、雑誌「工藝」の表紙で、図5は、表紙に布を使用し、レーモンドが1935年と1938年に出版した著作である。民藝運動は、この雑誌の地政学的姿勢を越えて、美術の人間的、精神的次元を擁護することが目的であった。



図4 「工藝」雑誌（1931-1946）

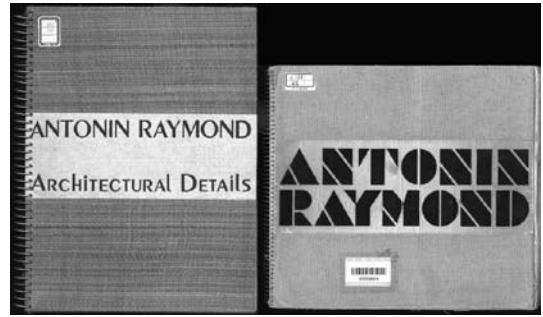


図5 レーモンドが出版した作品集

柳宗悦は《美》と《真》、《人間と美術》そして《自然》との関係、について思考を巡らした人物である。《機械の時代》の発展に対する《手の時代》を擁護するという強い願望が彼にはあった。先ほど述べたように、レーモンドが妻ノエミと一緒に、彼の美学と精神の面に自然との関係を始めて表現したのは、美術と手工芸の分野においてであった。つまり、レーモンドにとって、民藝の精神は、彼自身の日本発見に加えて、軽井沢の家の構想にまたとないコンテキストを提供することになったわけである。

3.2. 形態

軽井沢の家について、レーモンドは次のように書いている。「自分の理想の生活様式にぴったり適合した構造を構想する機会が与えられたら、自分に何ができるか、ということを試してみるチャンスであった。」

この言葉は、ル・コルビジエが1923年に出版した『建築へ』という著作の中の言葉に対応している。コルビジエ曰く「近代建築は一つの生活様式だ」。確かに、近代建築の主な賭けの一つは、社会の近代化によって引き起こされた新しい生活様式に適合したある空間形態を提供することにあった。建築家は、洋の東西を問わず、近代運動を自ら主張し、近代人の生活、欲求に合わなくなった踏襲的伝統の形態に対して断固として反対の位置にたつものだった。

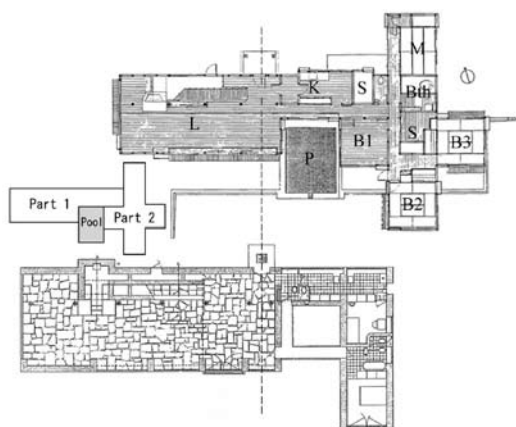


図6 夏の家とエラズリス邸

軽井沢の家につわる論争があった。この家は、1930年にル・コルビュエが設計したが建築されなかったプロジェクトを、部分的に土台にしているという事実から引き起こされたものである。具体的に述べると、この土台になったのがル・コルビュエのエラズリス邸プロジェクトで、実際には、この邸は彼が以前に行った一連の邸宅設計の原型の翻案の一つであり、1921年に建築したシトロアン邸はその一つの実現例であったというのである。先ほど私が示した情報を手がかりとしてみると、レーモンドは西欧のモダニズムの模範に基礎を置きながら、彼自身の建造物に《モダニズム》建造物としての構造的有効性を保証するというを目的としていた。まず、この根本原理を確保した上で、彼は、自分の日本体験から生まれたものや、自然と建築の関係に関わる彼の思考から出た諸々の性質を、自分の建築に自由に導入することができたのだ。レーモンド自身、軽井沢の家について1973年に次のように述べている。「軽井沢の家は日本趣味の際立ったものではないが、日本の伝統的形態は一つも採用されていない」。

軽井沢の家の設計図は二つの部分から構成されています。一つはル・コルビュエのプロジェクトから着想を得たもの、もう一つは《十字型》の

部分である。図面の左の部分には、大きい居間があり、そこに中2階へ上がって行く傾斜路が取り付けられている。夏の間レーモンドの事務所のスタッフが仕事していたのがこの中2階のスタジオだった。図面の中心は水回りの部分で、十字型の部分は寝室棟に充てられていた。



図7 自然の中の家

各々の部屋には窓、あるいは、戸袋に完全に収まる引き戸が備わっている。このように、風や人目に対して開放的な家だった。レーモンドは、軽井沢の家の建築以前に、日本の家の様々な特徴を観察し、それを軽井沢の家で実現したのだろう。1935年に次のように書いている。「庭と家は一体をなす。庭は家に入り込み、家は庭に滑り出す。草の中を這う蛇のように。欧米風の地面に置かれる箱型の家はここでは不可能でなのだ」。

日本の古い伝統様式で建てられた家とは反対に、軽井沢の家には高い垣や壁で囲まれた庭は存在しない。実は、家は自然と直接の関係に置かれていたので、風景自体がこの家の庭であると言える。この場合、自然とのマクロコスモス型（大宇宙タイプ）の関係を示している。理想化された自然の喚起としての庭がある伝統的タイプの家のような、ミクロコスモス型（小宇宙タイプ）とは対立する。しかしながら、日本の伝統の中には、ミクロコスモス型系とマクロコスモス型系の間中間的な庭のタイプがある。それは《借景》型の庭で、この中で

は庭の《人工的に造られた》風景と本物の風景は、視覚的な重層的立面図の方法によって結びつけられている。

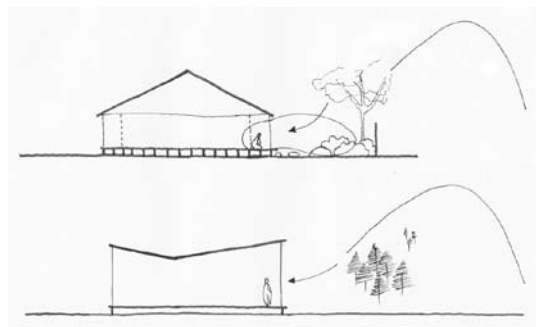


図8 ミクロコスモス型系（上）とマクロコスモス型系（下）

日本の家の特徴的な要素の中には、雨と日光を遮るひさしまで延びる切り妻型の大きな屋根と縁側を加えなければならない。しかし、レーモンドの意向は伝統的形態の家を再現することにはなく、日本のコンテキストの中に近代的な家を構想することだったことを思い出してほしい。

ところで、伝統的タイプの屋根や広い縁側はこのコンテキストに適応させるために必要不可欠というわけではない。これらを敢えて採り入れないことによって、レーモンドは、ル・コルビジエが呼んだところのものを確保することが可能になったのだった。それは、「建築のボリュームの決定的な説得力」つまり、形態上の家の視覚的インパクトのことである。このようにして、この建物は《バタフライ型》屋根で覆われることになり、居間の正面開口部の前には、レーモンドは民家などに見られる《濡れ縁》と呼ばれる小さいベランダしか付けられなかった。このことにより、内側と外側の間に直接的な関係が生まれ、さらに、家の周りに石や砂がないことによって、この効果は強調されることになった。結果として、家は草で覆われた地面から直接突き立っているという印象がある。

設計図は、全ての部屋から一つあるいはいくつかの風景が眺望できるように考えられている。レーモンドの経験と著作に基づいて、この設計図を分析してみると、筆者は、十字型の部分には二つの影響が見てとれるのではないかと考える。一つは、数寄屋造りという日本建築の様式からの影響で、もう一つはフランク・ロイド・ライトが使った十字型の設計の影響である。数寄屋造り形式の典型的設計には《階段効果》の形態があり、建物の異なったボリューム間にできる段差の効果によって、変化する視界やまた空気の循環を容易にすることができる。図9には、桂離宮の古書院の設計図と軽井沢の家になされた応用が見られる。

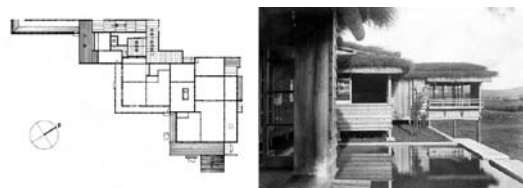


図9 平面図の階段効果

しかしながら、軽井沢の家では十字型の部分は左右対称だが、数寄屋造りの場合には対称形は厳格に避けられている。建築家、フランク・ロイド・ライトの下で積んだレーモンドの経験を考えると、タリアセンでのレーモンドの滞在以前、19世紀末からライトが使い始めていたシンメトリーの十字型にレーモンドがアイデアを借りたということはあることであろう。異なった部分の設計の統一のために、レーモンドは日本の伝統的建築家のように畳を基にしたシステムを使用している。このことは、畳一枚の半分に相当する三尺四方の枘目を重ねてみると、明らかである（図10）。このテクニックはフランク・ロイド・ライトに学んだもので、東京に建てた多くの邸宅に彼はこれを応用しています。このシステムはレーモンドにとって、理想的な方法であった。なぜなら、施工にあたる日本の大工にとって身近な比率方法に、近代的形態を適応させることができたからで

ある。

3.3. 材料

夏の家の施行には、レーモンドは軽井沢周辺で入手可能な材料を使用している。火山灰地からとれる砂利は、擁壁や土台に使用されるコンクリートに使われている。構造の柱には栗の木を、骨組みには檜を使用している。建物の壁面は杉の板張り、トタン葺きの屋根には唐松の枝が敷かれていた。材料は全て、数寄屋造りによく使われた処理であり、藁と砂で磨く方法を施された梁を除いては、可能なかぎり自然に近い無垢材の状態で使用されている。

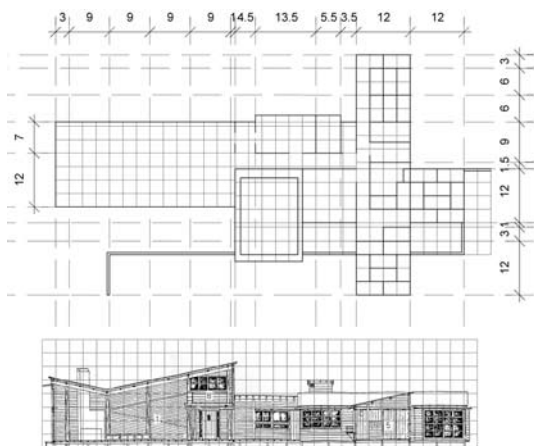


図10 平面図のシステム

天然の材料を使用することで、レーモンドは、《簡索性》と《儉約性》を適用して、自ら心に定めた《契約》を履行している。他方、彼は自分の仕事を、日本特有の、特に農村の建造物の伝統の延長上に位置付けている。農村環境では最も質素な住民は、自分たちの住居周辺にある天与の材料を使用する。日本の古い伝統では、地方的資源の使用が自然と密接に関連しているのは確かであるが、また同時に建築材の使用を厳格に規制する社会的階級組織にも関連しているのである。

ところで、レーモンドは彼が憧憬の念を感じていた農村の家の雰囲気に近い状態にいること、お

そらく、人間と自然の出会いの場である、有機的建築の理想に基づいた、フランク・ロイド・ライトの邸宅の雰囲気似た状態にいることを望んでいたと言えるだろう。レーモンドは、竣工から数年後の1940年に、軽井沢の家についてこう述べている。「屋根は一枚の巨大なテントのようで、その下で私たちは動き、働き暮らしています。家は丸裸？ そう、納屋のように裸なのだ外のすだれがおりている時は、全体はアフリカの酋長の原始的な宿舎の趣きがある。家具でさえ、大工が現場に残して行った材木の残りで作ったものだ」。(1973)

これらのコメントを読むと、レーモンドは構造の美や洗練さのために桂離宮を賞賛してはいるが、むしろ彼の理想である農村の暮らしに深く愛着の念を感じていたことが分かる。そこには、人間は自然と観照の一方的関係だけでなく、自然との相互関係にある生活があるからである。

彼は、このような憧憬によって、師匠、フランク・ロイド・ライトに忠実であり続けたのだが、自ら決めた原則を適用して、日本の農村の建築や、ヨーロッパの近代建築の先駆的建築において、ヴォリュームと細部の上での単純性を確保することに成功した。1940年に彼自身が言っている。「軽井沢の家では、私たちは一つの部屋にいたのではない。優れた建築に決定された一つの空間にいたのだ。近代建築においては、構造が唯一の装飾である。」

4. おわりに

軽井沢の家は、レーモンドの作品の中で、しばしば師匠フランク・ロイド・ライトとの、形態上における決別を表したものである。そしてル・コルブジエの形態に影響された新時代のデビューを示したプロジェクトでもある。しかし、これは完全に正確だとは言えない。というのは、レーモンドは戦後に、ライトから着想を借りた邸宅をい

くつか構想することになるからである。

これを決別の象徴として捉えるよりは、次のように考えるのがより妥当であろう。それは、軽井沢の家を、彼の憧憬、モダニスト的野望と、ヨーロッパと日本のアート・アンド・クラフト運動によって推進された精神的、美学的理想への彼の根本的愛着、この両者を結びつける調和のとれたかつ先入観なしの総合の一つの例として把握することである。レーモンドはこの傾向を、プロジェクトの中心に自然との関係の表現を置く事によって、調和のとれた方法で共存させることに成功している。建築上で彼の目的を実現するのに、レーモンドは欧米の近代建築の基準と日本の伝統建築の基準から厳選した要素を自分のものにして、地方の技術を尊重して、これを実地に適用したのだった。

軽井沢の家で、レーモンドは、同時期の近代建築に興味を持つ日本の建築家が示すものとは異なる解決法を提供している。軽井沢の家が興味深い理由の一部は、ここにある。しかしながら、この実現は、彼の同僚たちがやったように、当時日本が抱えていた、西欧のやり方にならって近代化したいという欲求や願望と、固有の文化遺産を守るという配慮の間にある葛藤の跡を物語っている。

軽井沢の家は、様々な主題に取り組むのを可能にしてくれた。形態と機能の関係のような近代建築の根本的問題、そしていわゆる《普遍的》価値と局地的価値のバランスの追求、強度の工業化のコンテクストの中での人間と自然の位置、などについても論旨を展開することができたのだった。

参考文献

本：

- フランク・ロイド・ライトと日本文化／ケヴィン・ニュート；東京：鹿島出版者、1997。
私と日本建築／A. レーモンド著；[三沢浩訳]；東京：鹿島研究所出版会、一（SD 17）、1967、243p。
自伝アントニン・レーモンド；東京：三一書房、1970、305p。

アントニン・レーモンドの建築／三沢浩著、東京：鹿島出版会、1998、242p。

A.レーモンドの住宅物語／三沢浩著、建築思潮研究所編集、東京：建築資料研究社、1999、206p。

Helfrich Kurt G. F., Whitaker William (ed.), *Crafting a Modern World: The Architecture and Design of Antonin and Noemie Raymond*; New York: Princeton Architectural Press, 2006, 364p.

論文：

Gloaguen Yola. "The "Architect" in Antonin Raymond's way of thinking. A definition based on Antonin Raymond's own words", *Journal of Asian Architecture and Building Engineering* (JAABE), vol.5, No.2, November, 2006, 8 p.

Gloaguen Yola. "An Insight into the Architect's Way of Design; Part 1: Antonin Raymond's Karuizawa house", *Japan Architectural Association Journal of Architecture and Planning* (AIJ), No. 619, September 2007, pp. 217-222.

Gloaguen Yola. *Towards a definition of Antonin Raymond's "Architectural Identity" – A Study Based on the Architect's Way of Thinking and Way of Design.* (アントニン・レーモンドの建築的アイデンティティの解説－建築家の思考方法と設計方法の研究), 博士論文, 京都大学, 2008.

Helfrich Kurt G. F., *Building the contemporary house: modernity, regionalism and the ideal of Japan in Antonin Raymond's residential designs, 1921-1952*, Ph.D. thesis, University of Virginia, 1997.

Oshima Ken Tadashi, *Constructed Natures of Modern Architecture in Japan, 1920-1940: Yamada Mamoru, Horiguchi Sutemi, and Antonin Raymond*, PhD thesis, Columbia University, 2003.

Vendredi-Auzanneau Christine, "Antonin Raymond's Intellectual Background: A Focus on the Czech Cubist and Modernist Architecture", *J. Archit. Plann.*, AIJ, No. 572, 147-152, Oct., 2003. / アントニン・レーモンドの学問的背景：チェコ出身のキューウビストモダニズム建築に無点をあてて、日本建築学会設計系論文集 第572号、147-152、2003年10月。

雑誌の特集：

A・レーモンド作品集：ライトを周る人々の作品・2、東京：洪洋社、1931、20p。

近代家具装飾資料十輯・レイモンド作品集、東京：洪洋社、1937。

レイモンド作品集、建築10月号特集、1961。

レイモンド木造建築集，建築4月号持集，1962.

“Antonin Raymond” , *Architectural Association Journal*,
Special Issue, Aug. 1962.

“An exhibit of the Work of Antonin Raymond” , *The Japan
Architect*, vol. 45, Dec. 1970, p.14.

アントニン・レーモンド，現代日本建築全集一／栗
田勇編著，東京：三一書房，1971，231p.

Antonin Raymond, *The Japan Architect*, vol. 33, 東京：新
建築社，spring 1999, 136p.